

Title	噫、峯村光郎先生
Sub Title	
Author	内山, 正熊(Uchiyama, Masakuma)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1978
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.51, No.4 (1978. 4) ,p.114- 115
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	峯村光郎先生追悼記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19780415-0114

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

噫、峯村光郎先生

内山正熊

二月十八日午後四時すぎ、峯村先生はベッドの上に乗身を起すようにいわれ、枕頭に呼ばれた御子様になき声をおかけになり、紙の上に「みんながんばれ」とお書きになったという。それから六時間後の十時四十六分安らかに息をひきとられた。昨年の暮に咽喉の手術をされて以後、声をお出しになることが出来なくなり、筆談をなさつていらしたが、最後がお近いことをお知りになつてか、川口君などが御見舞されると、お別れの言葉を書かれたという。私が十八日のお昼すぎ、済生会病院のお部屋に伺うと、先生はまだ飲んでいらしたのに、臉をはつきりお聞きになつた。ふと見ると先生の左手の上あたりの白布が動いている。光一さんがさつとタオルをあげて下さつた。先生は手をさし出して握手して下さつたのである。先生のぬくもりが私の手にほかに感ぜられた。十時間後に、先生は昇天されたのである。

峯村先生は、塾法学部の輝かしい代表的学者であり、最近で

は、公共企業体等労働委員会会長という社会的VIPとしてきわ立つていらしたので、単なる個人的な恩師というには余りにも大きな存在である。直系の弟子でもない私は先生について語る資格はないが、ただ予科二年以来四十年にわたり重陶を受けた一人として、ただ心からの感謝と御礼を申し上げずには居られないで筆をとつた次第である。実は私が塾法学部に奉職するようになったのは、峯村先生の御推挽によるのであり、先生のおすすめがなかつたならば、学問の道を選ばなかつたであろうことはたしかである。このように峯村先生に負うところ多いのは私だけではないであろう。どんなに多くの学徒が、先生からすすめられ、励まされて学問の道を選び進んだことであろうか。先生はわれわれの導きの星であつた。

「学問にとつて平安の大道はない、そしてその峻峭な小徑をよじ登るのに疲れることをいとわない人々のみが、ひとりその輝ける絶頂に到達する仕合せをもつのである」という言葉を先生はお好きであつた。この資本論序文の一節を、およそ先生の下で学に志した者で先生の口から聞かなかつた者はないであろう。その文字通り先生は学問の道をひたむきに邁進され、光り輝く峯の上に到達して、この世から去つて行かれた。その広い分野にわたつて築きあげられた先生の学問的業績は、峯村山脈といわれるにふさわしく、その裾野には、先生から教えを受け

た門下生が塾のみならず、各方面にひろがっている。

学者として、また公人としての先生を語ることは私の任ではない。ただ人としての先生について若干述べることで責をふさぎたい。昭和四三年の大学紛争さなかに、先生は興望をになつて法学部長の重責につかれたが、毅然として動じない先生をわれわれはどんなに頼母しく思つたことか。塾監局が封鎖されていてこれを解除すべくヘルメットの学生と交渉されるときも、ストで調停には裏も表も通じていられるのに、先生は学生とはかけひきなさらずにまともに対処された。先生は左右の学生から信頼される迫力をもつて居られた。熱と力に溢れる先生の名講義は、学生を魅了したが、時に毒舌や雑談が精彩を添えた。しかし卒直にいつて、酒も煙草をのまねず、謹敵で犯し難い真面目さが本領の先生の雑談は、どんなに面白くても、それは教訓的であつた。山本有三の小説の例をひいて、先生がいかに人生には無駄が必要だと力説されても、御自分分はたえずはりつめて努力精進されていたのである。この困苦しさがほぐれたのは、亡き則子夫人の蔭のお力があつたからではなからうか。われわれに、先生はよく奥様のことをお話しになつた。先生は本当に愛妻家であつたのである。結婚式のスピーチで、結婚前は単発エンジンの飛行機でも、結婚すれば双発エンジンになるのだと力をこめて仰言つたことがあるが、それは先生の実感

であつたにちがいない。その奥様に十年も前に先立たれてから、先生はどんなにかお淋しかつたことであらうか。それからずつとおひとりでお過しになつたが、日吉のお宅に伺うと、余生を学問にかけたライフワークのことを目を輝かせてお話しになるので、流石に先生はちがうなと思つたりしたのは浅墓なことであつた。あの頑健なお体でもつと御活躍になり、もつともつと長生きされるのではないかと思つたのに、意外に早く逝かれたのは、淋しさが蔽うべくもなく、早く奥様のところへいらしたいという御気持がつのつて来たからではないだろうか。先生のような本当の愛妻家を私は知らない。学者として公人として抜群でいらしたが、先生は家庭人として、夫としてすばらしい方であつた。

先生は、信州の山国出身らしい健剛そのものの、しかも折目正しい人格者でいらした。学者としても人間としても、優等模範生でいらした。峯村先生のような巨峯には到底アタック出来ないとしても、われわれがそれぞれ峯に向つて小径をよじ登つているのをしかと見守つていて下さると信じている。塾法學部は先生のような学者を必要としている。天がいつかの日に、
第二、第三のドクトル峯村を法學部に授けられんことを。